

三里塚へ

日刊
動労千葉

82. 10. 7

No. 1164

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五（六・八番）品五（22）七三〇七

勝利のカギは、国鉄労働者の 三里塚への総決起である

●全支部から総力で結集しよう！

●集合：成田運転区・十時・作業服

動労千葉は、第七回定期大会において「八〇年代に通用する自前の労働運動」路線の真価を発揮し、「一人ひとりが活動家になって」、反撃の闘いに決起していくことを圧倒的に確認した。そして当面する、三里塚二期決戦―57・11ダイ改阻止―検修・貨物合理化粉碎―現協協約改悪阻止―仲裁々定完全実施―国鉄再建監理委員会設置法案上程反対を中心とした秋期年末闘争の最重要の突破口が10・11三里塚闘争への大結集・大爆発であることを確信をもって満場一致確認した。

「国鉄―三里塚」での決戦こそチャンスだ

定期大会をめぐる情勢のポイントは、支配階級が体制的危機からの脱出をかけ、軍事大国产化―改憲、戦争へむけた反動攻撃を激化させ、とりわけ攻撃の軸を①行革を通じた国鉄労働運動破壊の攻撃と、②「成田用水」―買収政策による反対同盟解体・三里塚闘争破壊の攻撃にシフト、全力で勝負をかけてきているという点にあった。

この「情勢」を真正面でうけとめ、わが動労千葉の基本路線と労働運動の原点に確信を持って断固対決していこう、との意志一致が強固になされた画期的な大会であった。こうした反動攻撃といかに闘うのが、大会での多くの代議員の発言と執行部の提起によって鮮明にうち出された。

「闘い」だけが労働者の生きる道だ

「ヤミ・カラ・国賊」キャンペーンをもって開始された国鉄労働運動破壊攻撃は、ついに鈴木体制が「財政非常事態宣言」(9/16)「人勧凍結」「国鉄非常事態宣言」を発するにいたり、いよいよ本格的な攻撃、すなわち「民営・分割」の恫喝のもと、これまでに加えて更にパスの廃止・新採ストップ・現協改悪等々の有無を言わさぬ「緊急11項目」の強行実施の攻撃、また臨時国会にむけての「国鉄再建監理委員会設置法案」の上程策動・仲裁裁定凍結策動という全く許せない攻撃へとなだれこんでいる。

そして、検修・貨物部門の仲間の生首をとばす大合理化―57・11ダイ「改」―これでは「国鉄労働者は死ぬ」ということだ、いや、北炭夕張の現実を見るまでもなく、労働者がいったん闘いを自粛し「企業再建のため

には働こう」と言ったとたんに、政府や資本は無慈悲に労働者を殺し、虫けらのように踏みつけにして退職金も払わず全員首切で家族もろともほうり出してにおいて、そして資本だけは生きのびるのだ。どんなに厳しくとも、起って闘いぬく以外にわれわれ労働者の生きる道はないではないか。反動鈴木体制を労働者の実力でぶち倒す以外にどこにわれわれとわが家族の生きていく道が保証されるというのか。

動労「本部」革マル反動分子のように「民営・分割」の一言の恫喝で総屈服してしまうのではなく、われわれは第七回大会の討論と決定を通して、総反撃の闘いの道を選んだ。われわれは、11月前後を期して57・11と検修を軸とした反合闘争にあらゆる戦術を駆使して決起することを決定し、その態勢についたのである。

「10・11」が総反撃への突破口！

三里塚をめぐる情勢もまた「成田用水」攻撃、それと連動した革マルの卑劣なデマ攻撃による反対同盟破壊策動の中で、一挙に正念場に入入した。反対同盟十七年間の不屈の闘いに追いつめられ、一方で「二期のタイムリミットに追いつめられた敵が、ついに兇暴に居直って反対同盟つぶしに襲いかかってきているのだ。支配の危機をのり切るために、日本の労働者・人民の最強部隊である「国鉄」と「三里塚」を同時に叩きつぶすために一切の反動の力を総動員して決戦を挑んできたのだ。だからこそ、「反合」三里塚のこの焦点で決起し勝利することが決定的に重要なのである。その突破口―10・11へ、いざ総決起しよう！

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉碎せよ！